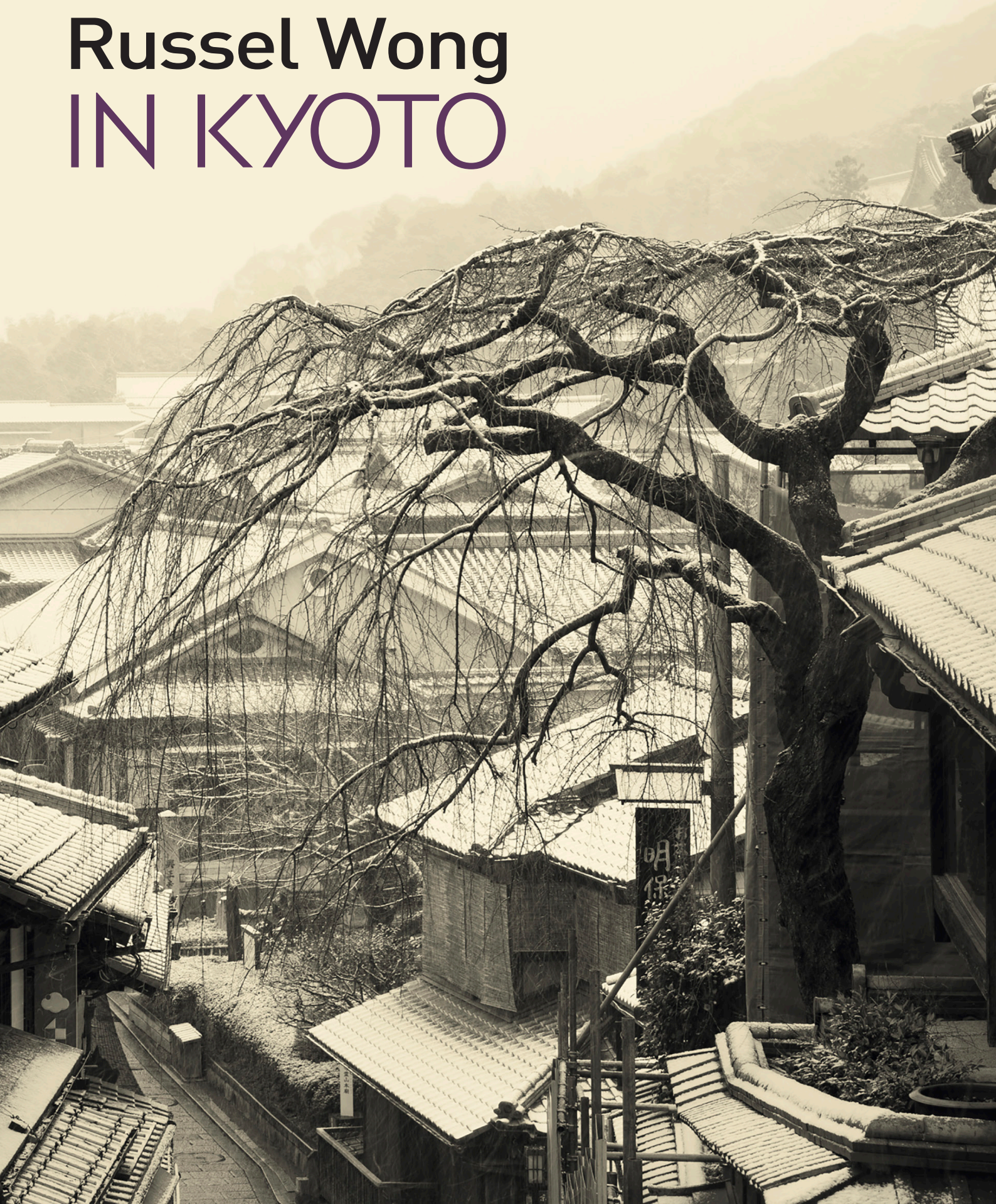
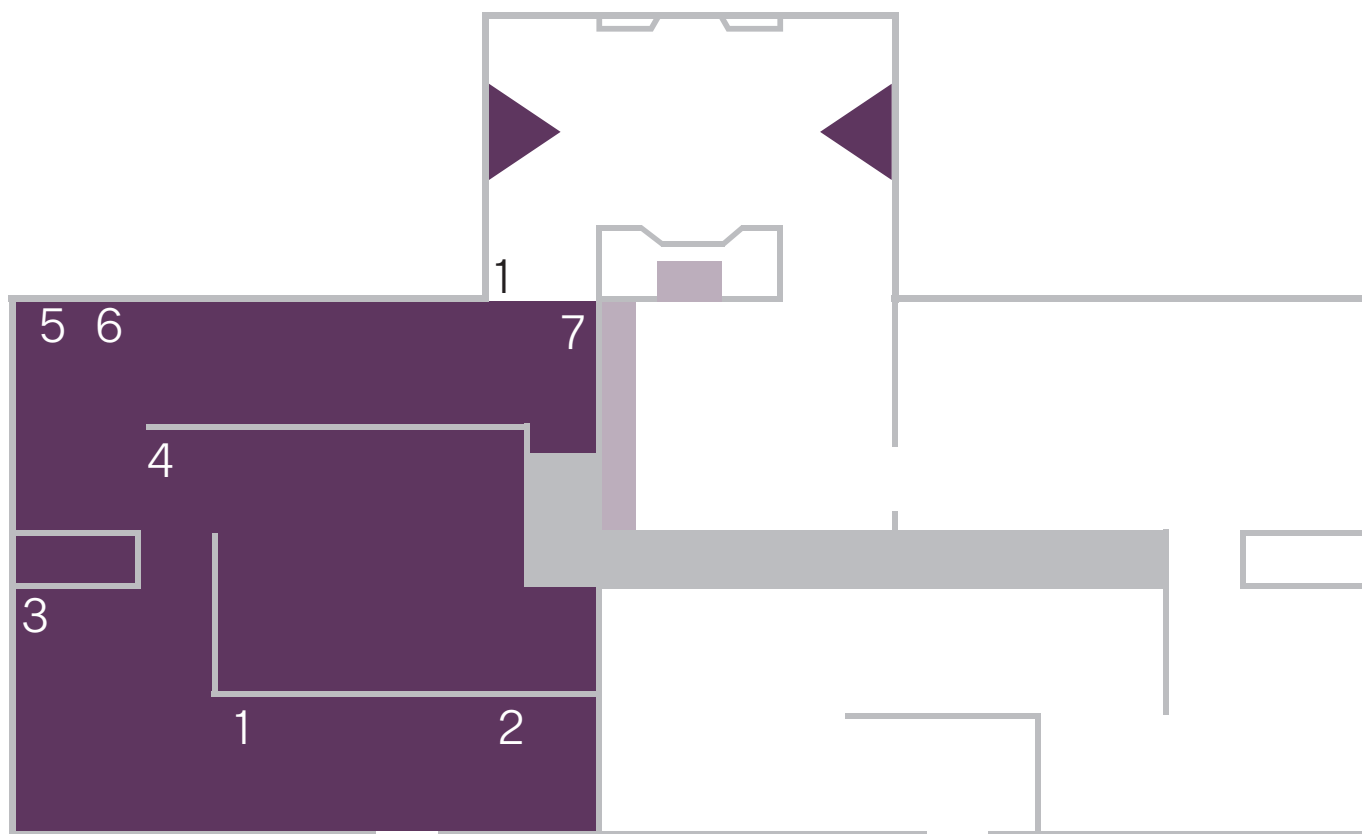


日本語訳

Russel Wong IN KYOTO





ギャラリーのフロアマップ

1 京都でのRussel Wong

日本、特に京都は常に国内外の写真家を惹きつけ、創作意欲をかき立ててきた。Russel Wong は2005年に渡辺謙が主演を務めた映画 Memories of Geisha (2005年 邦題: SAYURI) の彼の宣伝用の写真撮影のために東京を訪れた際に、京都と芸者コミュニティの撮影に興味を持った。渡辺との会話の中で京都のことが話題に上るにつれ、Wongはさらに興味を深めていった。

Memories of Geishaへの評価は賛否両論で、京都の芸者コミュニティからはほぼ不評と侮蔑を受けた。それでもなお、近年、この映画により世間の関心や興味が日本の芸者（京都では芸妓と呼ばれる）へと向けられることとなった。Wongは写真を通して、ほとんど語られたり見かけたりすることのない芸妓コミュニティの声を、世界に発信できるだろうと感じている。

芸妓コミュニティ

京都の芸妓コミュニティは閉鎖的で、伝統的な“一見さんお断り”というルールが現在も多くのお茶屋に残る。Wongは京都にある5つの花街*（芸者の出入りする場所。“かがい”、または“はなまち”と呼ばれる）全てに受け入れられるまでに5年を要した。

*五花街 (ごかがい)と呼ばれる、祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の五つの花街

木版画にインスパイアされる

ウォンはこの一連の作品を制作するにあたり、北川歌麿、葛飾北斎、歌川広重などの江戸時代の木版画からインスピレーションを受けた。彼が特に惹かれたのは、その構図、イメージの要素がどのように組み合わせられているか、そしてそこに描かれている女性のシルエットや肖像画だった。ウォンの写真には、彼自身が感じている懐かしさが滲み出ている。実際の京都の街並みや茶屋を、映画のセットのような縮図で捉えている。映画のセットで著名人と仕事をしてきた経験を持ち、それらに精通しているために、彼の写真はドラマチックな映画のようなクオリティーに仕上がっている。

ラッセル・ウォン

ラッセル・ウォン（1961年生まれ）は、国際的に有名なシンガポール生まれのファッション・ポートレート写真家で、リチャード・ギア、ジャッキー・チェン、ミシェル・ヨー、チャン・ツイー、イザベラ・ロッセリーニなどのオスカー受賞監督やハリウッドセレブと25年に渡り仕事をしてきた経験を持つ。ラッセルはタイム誌の表紙撮影を担当する精鋭の写真家たちの一人である。ポートレート写真に加えて、静物、建築、風景などの一連の作品も手がけている。

2 京都

京都は日本で3番目に大きな都市であり、最も古い都市のひとつでもある。794年には日本の首都となっていた。以前の都である奈良と同様に、中国の唐代の首都である長安（現在の西安）をモデルに碁盤目状に設計されていた。京都は首都であり、794年から1869年まで日本の皇室の本拠地として機能していたが、必ずしも常に日本の政治権力の中心であったわけではない。鎌倉時代（1185年～1333年）には鎌倉が政治の中心地として機能し、江戸時

代（1603年～1868年）には徳川幕府が江戸（現在の東京）から日本を支配していた。

日本の天皇

天皇家は、9世紀以降から徐々に政治の実権より離れ、12世紀には将軍家が国を支配するようになった。都は京に置かれたままであり、京都が国の文化の中心であったが、実際に国を治めたのは将軍家であった。1603年には徳川幕府が成立し、後に尊皇討幕を掲げる勢力に敗れるまで、江戸を政治の拠点とした。明治政府が1868年に成立すると、天皇と皇室は東京に移った。第二次世界大戦後の1947年、新憲法が公布され、天皇の存在は再び象徴的なものとなった。

生き残り繁栄した京都

皇室の運命が盛衰したように、京都の運命も劇的に変動した。応仁の乱（1466-67）では京都御所（皇居）と都市の大半が破壊された。そのため、今日の京都の大部分は江戸時代に遡る。政治の中枢は江戸であったが、京都は文化、宗教、経済の中心地として隆盛を極めた。幸運にも、第二次世界大戦の終わりの数ヶ月間、日本の各都市を襲った空襲を京都は

免れ、今日、市内には20以上の博物館と30以上の大学が点在している。

3 芸妓と舞妓

一般に知られている京都の芸者—花街（芸者地区、「はなまち」ともいう）にいる芸妓（京都での呼び名）と舞妓（修行中の芸者）—は世界的にも有名な日本文化の象徴である。芸妓・舞妓は、約130年前に設立された女紅場と呼ばれる芸妓・舞妓の養成学校で専門的な教育を受ける。基本的な訓練には、茶道、唄、書道、華道だけでなく、古典舞踏や三味線・太鼓・琴などの和楽器の習得が含まれる。

京都 花街

京都には祇園甲部、宮川町、先斗町、上七軒、祇園東の5つの花街がある。お茶屋(厳しく規制された高級茶屋)はこれらの地区で営業している。初めての客は常連客の紹介なしでは入ることができない。お茶屋は、季節や行事にふさわしい料理、招待客、芸妓・舞妓によるエンターテインメントを伴った宴会を、常連客の好みにぴったりと合うように用意する。

季節ごとの行事と祭礼

花街の年中行事は、季節の変わり目や地元の歴史、宗教行事や祭礼とともに巡ってくる。師匠への感謝の気持ちを表したり、歴史上の人物を讃える行事もある。花街は地元の神社や祭事と密接に繋がっている。祇園甲部、宮川町、先斗町、祇園東は八坂神社と祇園祭（7月開催）とに深い繋がりがある。最古の花街といわれる上七軒は、梅花祭（2月）とずいき祭（10月）を行う北野天満宮とのゆかりが深い。年に一度の時代祭（10月22日開催、祇園祭とともに京都で最も重要な祭りの一つ）には、各花街から芸妓・舞妓が輪番で参加する。

4 五花街(ごかがい) - 京都の五花街

芸妓業のために公式に指定された地域

宮川町（みやがわちょう）

鴨川の東岸に位置する宮川町地区は、1666年に築かれた。1751年には、花街としての営業許可が下り、間もなく京都における芸能の中心地となった。宮川町は南座が近隣にあるため、歌舞伎との関係が深い。1610年に設立された南座は、京都の主要な

歌舞伎劇場である。この地域のお茶屋には、有名な歌舞伎役者の名前から付けられているものもある。現在、宮川町の一部は歴史的景観保全修景地区に指定されている。

祇園甲部と祇園東

江戸時代初期、八坂神社や清水寺への参拝客を迎えるために、多くの茶店が開いた。次第に店はお茶屋に変わり、給仕女は芸妓になっていった。1670年頃には、徳川幕府から正式な許可を得て、花街として商売をするようになった。19世紀初頭には、700軒の茶屋があり、芸妓・舞妓も3000人以上いた。

また、同じ地域には広大な武家屋敷があった。1870年にその屋敷が取り壊されると、代わりに茶屋が建てられ、花街は拡大した。1881年には祇園甲部と祇園乙部（現在の祇園東）に分かれた。現在、花街の一部は伝統的建造物群保存地区に、もう一部は歴史的景観保全修景地区に指定されている。

先斗町（ぽんとちょう）

1670年に鴨川周辺で大規模な公共事業が行われ、新しい通りには茶店や宿が建てられ、旅人や高瀬川(運河)で物資を運ぶ船頭を迎え入れた。徐々に発展していき、1712年には正式に花街としての営業が許可された。

上七軒（かみしちけん）

15世紀中頃、北野神社（現在の北野天満宮）の一部が焼失した際、神社は修復され、その地域に7軒の茶店が建てられた。この7軒が上七軒の始まりだ。1587年、豊臣秀吉はこの神社で大規模な茶会を開き、商人や事業家たちは秀吉を盛大にもてなしたという。秀吉はそのお返しに、お茶屋としての営業権を独占的に与えたといわれる。

もうひとつの由来は、神社の巫女にまつわる話だ。神社の巫女は若い女性でなければならなかったため、巫女を引退した後は茶店の給仕女として働いた。これが上七軒の芸妓の由来だ。その後、上七軒は北野天満宮の参拝客や西陣織地区の豪商などに人気が出た。現在では、上七軒は重要な景観整備地区として、また歌舞練場は歴史的な重要建物に指定されている。

5 霞がかった芸者の起源

白塗りの顔に伝統的な衣装を身に着けた日本の芸者は、多くの人にとってエキゾチックで好奇心を掻き立てる存在だ。江戸時代、このような芸能に従事した人々は女性だけではなく、彼ら/彼女らは遊郭の揚屋やお茶屋とは密接な関係にあった。芸者の始まりは、花魁が来る前に客をもてなす男性であった。1751年までこの職に就く女性はいなかったが、1800年までには女性たちの職業となった。

吉原、島原、新町：昔の遊郭

江戸で最も有名な遊郭は吉原だった。吉原は、京都の島原、大阪の新町と並んで、幕府が区域を定めて許可した三つの遊郭の一つである。吉原のような遊郭には、揚屋、歌舞伎劇場、お茶屋、相撲場、落語や音楽、舞踊などの客を引き付ける様々な娯楽施設が集まっていた。こうした地域はやがて、最新のファッションや音楽、演劇に出会える場所として知られるようになった。芸者も、花魁や歌舞伎役者と共に流行発信者だった。

現代の芸者、伝統の擁護者

芸者は、近代日本の歴史の中で、説明しづらく扱いにくい存在である。大衆文化においては、芸者のイメージは、日本の国や伝統の象徴、また東洋的な女性らしさの象徴として使用されることがある。しかし、江戸時代の芸者は、必ずしもそのような型に当てはまるものではない。1920年代に日本が開国し、多くの日本人が西洋のスタイルを好むようになると、芸者は日本の伝統的な芸術と文化の擁護者となった。

現在、芸者はお茶屋で行われる宴会で、日本舞踊や音楽などの芸能を披露するプロの芸術家である。

6 舞妓・芸妓のキャリア

芸舞妓は花街の中でのみ許可されている登録制の職業である。中学卒業後、15、6歳で舞妓としてデビューすることができる。舞妓になるためには、“お姉さん”と呼ばれる先輩芸妓と盃を交わし姉妹関係を結ぶ必要がある。このお姉さん芸妓は、舞妓もしくは新米芸妓の花街界でのデビューに大きな影響力を持っている。舞妓は20歳を超えると、「衿替え」と

いう儀式を経て芸妓に昇進する。その後、年季が明ければ（通常、舞妓の期間を含めて6－7年）いつでも辞めることができる。

家族同様に

舞妓・芸妓志望者は、置屋と呼ばれる下宿先に住み込まなければならない。置屋とつながることで、舞妓・芸妓はキャリアを形成していくことができる。そして、経営者（お母さん）とある種の親子関係を築くことになる。お姉さんもまた、妹の母親代わりとして若い芸舞妓の世話をし、その姉妹関係は花街の世界にいる間ずっと続く。お姉さんは、お座敷での宴会（畳間での伝統的な日本式晚餐）や花街コミュニティで、妹の面倒をずっと見続けるのである。このような親子・姉妹関係は、芸舞妓社会において上下関係の一部を形成している。

引退

芸妓に定年はない。芸妓が身を引くときには、「引き祝い」と称し、花街の中で世話になった人達へ引退の挨拶をし、配りものを渡し、今後のお付き合いの仕方を伝える。引退の理由は、結婚や単に新しい職業に就きたいという場合が多い。

7 花街でのマナー

芸妓や舞妓への憧れや、京都への外国人観光客の増加は、花街を行き交う芸舞妓にとってとてもやっかいなことになっている。外国人観光客は、宴席の約束で花街を歩く芸舞妓の写真を撮るために、彼女たちを追いかけたり、道を塞いだり、群がったり、さらには着物を引っ張ったりする。

熱意を抑える - ストーカー行為は止めて

芸妓や舞妓が、伝統的な衣装を身に着け、観光客を避けながら花街の狭い路地を通ることは非常に困難で、茶屋を行き来しているだけで時間がかかってしまう。しかし、宴席に遅刻し、お客様を待たせることは決して許されない。そのため芸妓や舞妓は、立ち止まって写真撮影に応えることができない。また、芸舞妓の中には、写真を撮られるのを嫌がる人もいる。

くれぐれも芸妓や舞妓の周りに群がったり、彼女たちの住まいに押し掛けたり、夜間SNSの写真を撮るため、彼女たちに付きまとうような行為はしないでくださいね。

遊び場でもテーマパークでもない

ガイドブックには「芸者ハンティング」を謳い、紹介しているものがあり、芸者を街中で追いかけてようとする観光客もいる。京都で最も有名な花街である祇園を、歴史テーマパークの一種と誤解している観光客もいる。しかし、祇園をはじめとする花街は、確かに風光明媚ではあるが、普通の京都の人々が穏やかに暮らし、商売を営む京都の街の一つに過ぎない。

プライバシーの尊重

京都市はこのほど、祇園のメインストリートである花見小路沿いの路地での写真撮影を禁止する条例を施行した。許可なく撮影した場合には、1万円(\$125 SGD)以下の罰金が科せられるようになった。芸者に出会ったら、まず「写真を撮ってもいいですか」と声をかけるのが礼儀である。芸者は次の約束のため急いでいることが多いので、丁重に断られても驚かず、しつこく追いかけることはやめましょう。